

「今、私の晴雨計は！<sup>35</sup>」

「写実絵画ブームと  
アンドリユー・ワイエス」

平 山 征 夫

「芸術の秋」に相応しく絵画の話をしよう。現在、絵の世界ではちよつとした「写実絵画」ブームだ。先般NHK「日曜美術館」でも「写実の行くへ」という美術展を中心とした写実絵画の特集を組んでいた。書店の美術コーナーにもこれまでになく多くの「写実絵画」の画集が並んでいる。

このブームのきっかけを作ったのは、明らかに二〇一〇年に千葉市・緑区の昭和の森向いにオープンした「ホキ美術館」である。この美術館は、(株)ホキメディアの経営者・保木将夫氏が自己所

有している写実絵画を専門に展示する美術館として開館したものである。保木さんは以前から海外で絵の購入をしていたが、ある時森本草介さんの「横になるポーズ」という裸婦の絵を見て、写実絵画の魅力に取りつかれ、以後多くの写実絵画を蒐集してきた。

それを年一度近所の人たちに開放展示していたが、一〇〇〇人も押し寄せるようになり、美術館の建設に踏み切ったのだ。

オープンして間もない頃、私はこの美術館に出かけた。既に求龍堂の相次ぐ画集出版で写実画家の野田弘志や原雅幸、青木敏郎などの絵に興味を持っていた私は、彼らの作品が所蔵されていると聞いて遠路出かけたのだ。その美

術館には絵を見る前に建物のユニークさにまず驚かされた。宙に浮いた長い箱型を組み合わせたような建築は衝撃的だった。入場してチケットを求めようとしたら、館長の保木さん自身がおられた。この美術館で初めて直に作品に接した磯江毅、島村信之、諏訪

敦、石黒賢一郎、五味文彦、小尾修、大畑稔浩、塩谷亮、羽田裕などの作品に感動すると同時に、日本の写実絵画分野に多くの逸材

が育ってきていることに驚いた。その中に新潟でも一時活動し、最後の瞽女・小林ハルさんを描いた鉛筆画木下晋も含まれていた。特にスコットランドに移住してなかなか作品を見られなくなつた原雅幸の絵を堪能出来て大満

足だった。同時に「原達に続く若手の写実画家がここから沢山育つてゆくだろう」と直感した。帰り際出口におられた保木館長に思わず「良い絵を沢山有難うございました。また来ます」と申し上げた。そしてこの美術館からこの二年位所蔵作品を編集した写実絵画の画集が次々と出版され、沢山の写実画家が世の中に広く紹介された。

求龍堂の画集出版(一九八七年)で知った「原雅幸」は、N・Yで個展を開き「日本のワイエス」と絶賛されていた。調べてみると彼の絵は「画廊でしか取り扱われず、しかもそれまでに描いた作品はすべて完売していた。原の絵を県立美術館に紹介したところ

県立美術館も購入希望を強く持った。I画廊のお世話でその後しばらくして彼の絵を購入出来たのは幸いだっただ。原は「書けない物が無くなった気がする」と写実絵画への自信を述べたが、見る者にもその才能が圧倒的迫力で伝わってきた。原が描くのは荒れ野などの風景が殆どだが、画集の中に祖父を描いた人物画がある。人物の内面を描いていて秀作だ。もっと人物画も描けばと願っているが、その後見ていない。原がきっかけで前述のように野田弘志や青木敏郎へと写実絵画への関心は広がっていったが、その前提として私の中にはアンドリュー・ワイエスの存在があった。

アンドリュー・ワイエスが二〇

〇九年一月に91歳で亡くなって8年が経った。今でもアメリカで最も人気のある国民的画家である。今年生誕一〇〇年ということ。米国では記念展覧会が開かれているし、日本でもワイエスの作品所蔵で有名な「丸沼芸術の森」で記念展が開催中で、これも先日NHK「日曜美術館」で採り上げられていた。

身体が虚弱で学校に行けなかったワイエスは、生まれたペンシルバニア州フィラデルフィア郊外のチャッツ・フォードと別荘のあったメイン州クッシングの二か所以外は殆ど旅しなかった。有名な挿絵画家だった父・N・Cワイエスの厳しい指導もあって早くから才能を開花させていたが、そ

の長い画家生活で描いたのはこの二つの地域の自然とそこに住む人々だった。同じ場所の風景・人物を何度も何度も描いた。近所に住むカーナー夫妻、ワイエスが繰り返し描いたオルソンハウスの住人でスウェーデンからの移民クリステイーナとアルヴァロ姉弟、同じくフィンランドからの移民エリクソンとシリ父娘など、慎ましやかながら逞しく自然と一体となって生きる人々を風景と共に繰り返し描いた。そうして、移民の人たちの姿などを描くことで、ワイエスは「アメリカとは何か」を問い続けたと言われている。

私が初めてワイエスの絵を見たのは、大手新聞の日曜版の表に

載っていた代表作「クリステイーナの世界」だった。見た途端背筋に何かが走った。同時に何故か「静謐」という言葉が浮かんだ。単に野原に座る女性と遠くの家を描いた風景画と思ったら、足が不自由なクリステイーナが必死で手で草を掴み自分の家であるオルソンハウスを目指して這ってゆく姿を描いた絵であると知り、さらに大きな感動を受けた。それからワイエスの画集を買集めた。アメリカで出版され日本ではまだ発売されていない画集も求めた。出張でニューヨークに行った時も、空いた時間に訪れたのは、メトロポリタンでもグッゲンハイムでもなく「クリステイーナの世界」のあるN・Y近代美術

館だった。しばらくして世田谷美術館でワイエス親子三代（ワイエスの息子ジェイミイも有名な画家）の美術展が開催された（一九八八年）。それは、今でも最も印象に残っている美術展となった。その後もテンペラや水彩画、そして習作を含む素描などワイエスの作品を多く見てきた。その多くは写実画だが、水彩などは違って、早いタッチでその対象物を表している。現在の写実絵画ブームの中で、私にとってその原点ともいえるワイエスの絵を振り返ってみると、写実であるかどうかは問題ではなく、あくまで描く対象物の本質を表現する手段として選ばれた手法なのだと思う。

（平成29年10月17日）